

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第11集

館林市埋蔵文化財分布調査報告書(2)

BUNPU -CHOSA

1984

館林市教育委員会

はじめに

館林市教育委員会

教育長 堀越亘

本年度の分布調査の報告書が完成いたしました。

遺跡とは、過去の人類の足跡ということができます。

私達の祖先が、まちがいなくこの大地の上で生活をしていたことの痕跡です。

遺跡から出土する土器や石器は、そこに生きた人々のくらしの証拠品です。又、遺跡そのものは、そこで生きた人々の生活の環境といったものを示してくれています。

そこには、自然環境に左右されながら、又地理的条件に制約されながら、よりよい生活を求めて、より豊かな生活を求めていた人々の「生きざま」が確実に読みとれます。

今、私達も、よりよい生活、より豊かな生活をしたいと願っています。

現在は、よく「環境の時代」と言われます。

人間が、生きていくためには、それに適した環境が必要です。

そのために、私達は今、私達の周りの環境を整備しようとさえしています。

「アメニティの創造」「人間住環境の整備」よく聞かれる言葉です。

より豊かな生活、より利便性の高い生活を望む時、よりよい環境づくりが必要であることはいうまでもありません。

しかしながら、それがとて付けたものであってはいけないと思います。

地域に合致した、私達の祖先が、生活をしてきた環境をふまえての環境づくりでなくてはならないはずです。

このように、私達の周囲に目を向ける時、「物」を通して語ってくれる過去の人々のメッセージを、私達は、確実に読みとらなくてはなりません。

今回の調査が、その一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって、御指導・御協力下さいました皆様方に、深くお礼申し上げます。

例　　言

1. 本報告書は、館林市内の分布調査の第2年次の調査結果をまとめた調査報告書である。
2. 本年度の分布調査は、五年計画の第2年次にあたり、市内の西南部を中心に実施したものである。
3. 本分布調査の主体は、館林市教育委員会であり、その組織は次の通りである。

教育長 堀越 亘
教育次長 島田 勇吉
事務局 館林市教育委員会 文化振興課 文化財保護係
課長 森田 茂
係長 三田 正信
社教主事 落合 敏男（59年6月まで）
小林 一吉（59年7月より）
学芸員 岡屋 英治（担当）
主事 石井 洋史
調査補助員 寺内 景子
作業員 藤坂 和延 高橋 智子

4. 調査の期間は、59年4月～60年3月までである。
5. 調査に伴う諸費用は、国・県補助により館林市が負担した。
6. 本報告書の図面作成・トレースは、藤坂が行い、写真撮影・文章・編集は、岡屋・藤坂が行った。
7. 本報告書中、必要な部分にはトーンを使用した。
8. 調査にあたり、踏査協力者として、次の方々に協力をお願いした。感謝いたします。

徳江秀夫・小島敦子・岩崎泰一

本 文 目 次

はじめに	1
例 言	2
本文目次	3
図版目次	4
写真目次	4
第Ⅰ章 調査の目的	5
第Ⅱ章 調査の方法と経過	6
第Ⅲ章 館林の環境	10
第1節 地理的環境	10
第2節 歴史的環境	13
第Ⅳ章 調査の内容	17
第1節 赤羽地区（上赤生田）	17
第2節 六郷地区（西南部）	19
第3節 三野谷地区	23
第Ⅴ章 まとめにかえて	28

図 版 目 次

第 1 図	調査実施地区	7 ~ 8
第 2 図	館林の地勢と現況	11 ~ 12
第 3 図	館林市内遺跡分布図	15 ~ 16
第 4 図	赤羽地区(上赤生田)の地形と遺物の分布	18
第 5 図	六郷地区(西南部)の地形と遺物の分布	21 ~ 22
第 6 図	三野谷地区的地形と遺物の分布(1)	24
第 7 図	三野谷地区的地形と遺物の分布(2)	25 ~ 26

写 真 目 次

写 真 1	調査風景	6
写 真 2	館林を代表する景観	10

第Ⅰ章 調査の目的

館林市は、群馬県の東端に位置する中核都市であり、利根・渡良瀬川という両大河の影響をうけた低台地と沖積低地から成りたつ地域である。

水辺の低台地としてあったこの台地は、水の確保できる場所として、古代から現在まで、生活の場として活用されつづけている。

古くは、旧石器時代から、細々ながらその痕跡がみられ、縄文・弥生時代と各時代を経て、江戸時代には、館林城の城下町として、又近年に至っては、東毛地方の中核都市として、連綿として続いている。

しかし、近年は、土地の再開発がさかんであり、過去の人々の生活の跡は、新しい人々の生活の場として生まれかわりつつある。

こうした現象は、人々の生活の場が、同一フィールド上で行なわれるかぎり、しかたのないことと言ふことができよう。

本市における埋蔵文化財包蔵地に対する基本的な調査は、昭和46年、群馬県遺跡地図作成時に実施されたままで、その後環境変化に対する追調査は、なされていない。

文化財保護の一つの基礎ともなる遺跡台帳についても同様である。

このようなことから、現状では、すでに破壊された包蔵地があったり、未周知の包蔵地が工事中に発見されるなど、台帳自体にもズレがあり、包蔵地の管理や開発行為との調整において支障が表面化しつつある。

こうした理由から、埋蔵文化財の包蔵地に対し、精度の高い分布調査を実施するものとし、台帳の整備をはかるとともに、今後の埋蔵文化財の保護保存計画を策定することを前提として昭和58年度より分布調査を開始した。

又、今回の調査では、ただ単に遺跡の存否という問題だけでなく、館林における地域特色といったものを考える時の素材となる調査を行うこと、過去から未来に向って託された人間生活に対する現時点での記録となりえることを、一つの目的としている。

第Ⅱ章 調査の方法と経過

今回の分布調査は、昨年度の調査の結果をもとに、やや計画を変更した。

昨年度の調査において、簡林の地形は、洪積台地と沖積低地の出入りがはげしく、当初計画したものより、歩く範囲が広いことがわかったため、3年間では市内全域が、調査できないという理由から、調査年度を5ヶ年とした。

調査区域は、旧地区を中心に、第1年次（昭和58年）郷谷・赤羽地区、第2年次（昭和59年度）六郷・三野谷地区、第3年次（昭和60年度）多々良・渡良瀬地区、第4年次（昭和61年度）館林・大島地区、第5年次は、（昭和62年度）市内全域を対象とした補充調査とした。

各年度毎に、踏査の結果をまとめ、図面化するとともに、最終年度に、遺跡分布地図の作成・保護・保存・管理計画の策定を行うこととした。

調査方法は、ただ単に遺物の存否、遺跡の存否のみを確認するのみでなく、地形図をもとに地形の確認、地形変化の確認、微地形の確認を行いつつ、遺物の分布状況を確認し、遺物の時期等もその都度記録していく。また土地利用者等に、耕作時や土地改良の状況も聞きとりを行った。

夏期は、野菜等の農作物の関係から遺物等の確認ができないため、この時期に地形の確認を行い、冬期に、遺物採取を行った。



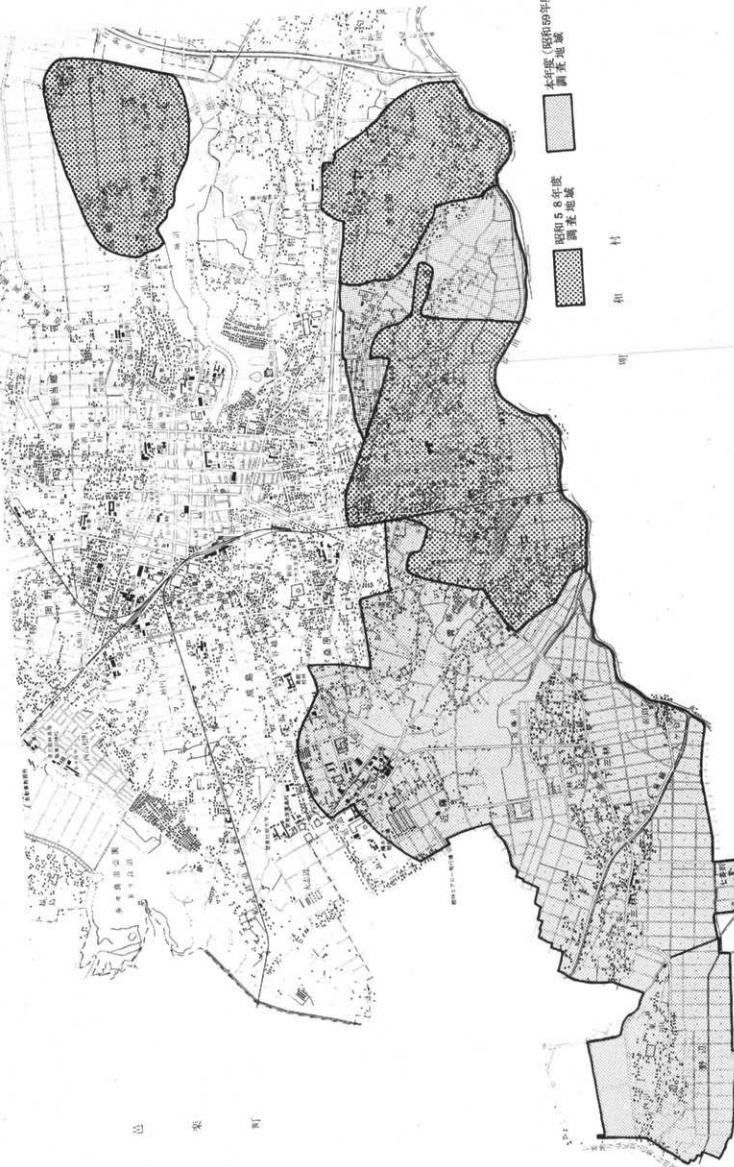
写真1 調査風景

第1回 調査実施地域図
千代田町

本年度(昭和59年度)
調査地域

昭和58年度
調査地域

明和村



遺物、地形のマッピングには、2,500分の1の都市計画図を使用し、現地で作図するよう心がけ、調査終了後整理するようにした。

第2年次の本年は、昨年の調査を参考に、赤羽地区の残り部分、六郷地区の西南部、三野谷地区の調査を行った。調査は、台地のつながり、遺跡のつながり等から、他の地区に一部くい込んだ部分もある。

調査区域を第1回に示したが、それぞれの地区の小字名をあげると、

赤羽地区（上赤生田）

大林・林・南・谷向・上北田・下北田・上耕地・上ノ前・宮内・蛇沼の一部・赤生田前

六郷地区（西南部）

宮田の一部・諫訪・大道西の一部・中島・富士原前の一部・堀切・障子の一部・北小袋・

小袋・南小袋・大塚・清水橋・中堤・陣谷・苗木西・萩原・苗木・広手・伝右エ門・亀甲

・雲雀・開拓の一部・北近藤・南近藤

三野谷地区（全域）

沼端・稻荷前・宮内の一部・道祖神の一部・近藤新田の一部・道林・下耕地・沖・天王前

・鶴沼・北谷・前田・西谷・田谷前・天神前・中林・礪林・一丁根・山・柳戸・根津屋・

小曾根・台・大曾根・新田北・雷電・谷中・羽沼・新田・新田西・相ノ谷・東山・大林・

西山・申子前・長良林・申子・小林・志部・道木下

以上である。

なお各部分は、台地及び池沼によって区切られており、台地にそっての調査を行ったため小字全域の調査とはなっていない。

本年度の調査をもって、鶴林南部の調査は、一部をのぞいてほぼ全域終了である。

第Ⅱ章 館林の環境

第1節 地理的環境



写真2 館林を代表する景観

館林市は、関東地方のほぼ中央部に位置する市である。

関東山地に源を発する利根川は、山合いを南流し、前橋付近で平地に出て東流する。本市の南東約16kmの所で、足尾山地に源を発する渡良瀬川を合流させる。

本市館林は、この両大河に挟まれる地域にある。渡良瀬川遊水地が示すように、本市付近は内陸部にありながら、比較的標高の低い地域である。

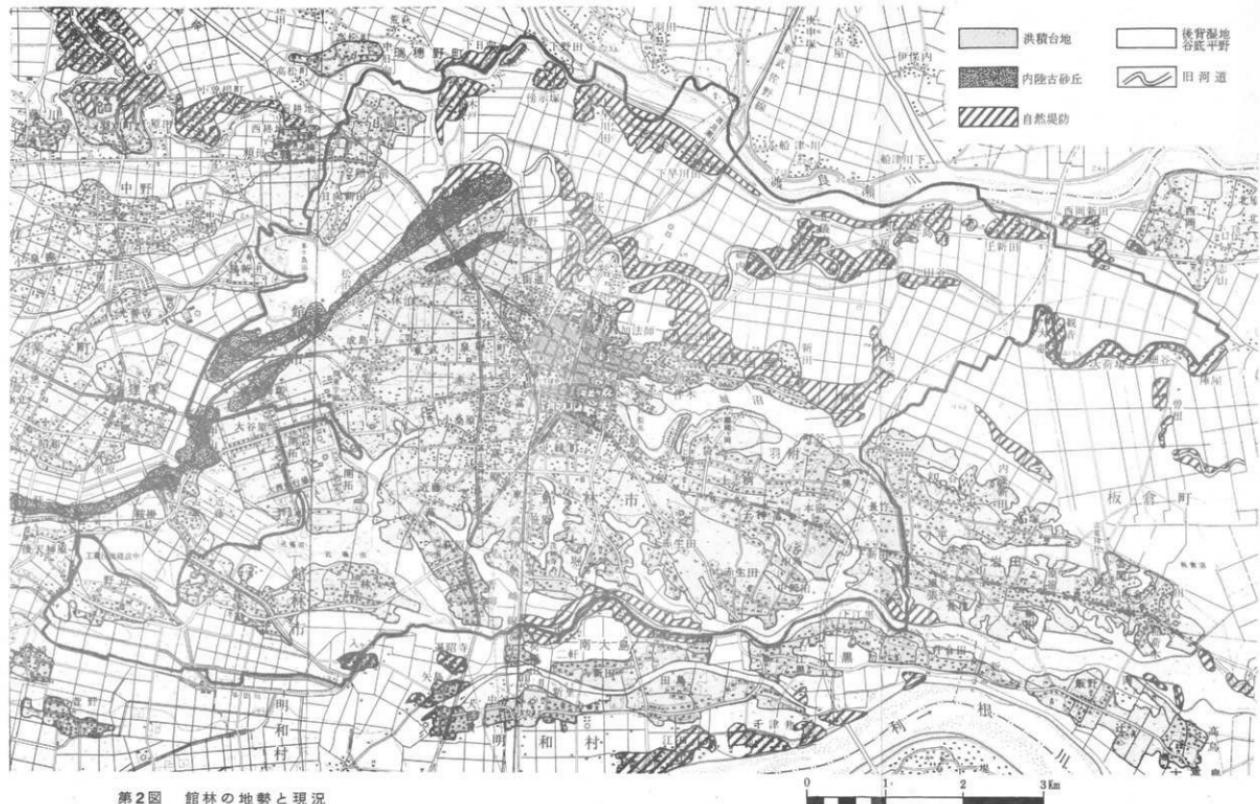
市の標高は、最も高い高根で33.6m、最も低い湿地帯では1.6mほどである。

利根・渡良瀬川が形成したと思われる本地域の地形は、非常に趣深いものがある。

第2図に、本市を含めた周辺地域の地形図をあげた。

これを見ると、本市の中央部は、洪積台地が広がっていることがわかる。

この洪積台地は、「邑楽・館林台地」と呼ばれ、太田市高林から、邑楽郡板倉町へと延びる比較的低い低台地で、東にむかひゆるやかに傾斜する。標高は、本市付近で、19~25m程度である。基盤を利根・渡良瀬が運んだ砂・粘土・シルトとし、その上に、中部・上部ロームをのせる群馬県にあっては、比較的古い洪積台地である。



第2図 館林の地勢と現況

台地の西側にそうように、千代田町古海より、本市高根まで続く、古砂丘が存在している。台地を取り囲むように、沖積低地が広がる。

低地は、利根・渡良瀬をはじめとするその他の中小河川によって形成されたものと考えられる。

低地と、台地の境は、複雑に入り込んでおり、その谷頭に、城沼、多々良沼、近藤沼をはじめとする数多くの池沼地が存在している。

調査によれば、これらの谷は、台地の奥深くまで入り込んでおり、現在では、埋没してしまった谷も多い。

これらの低地の中には、数多くの自然堤防が観察され、利根・渡良瀬川等のかつての流路を予想させる。

沼や谷は、人間の生活の環境を形成すると同時に、その行動を制約していると考えられ、遺跡の分布等には、大きく影響をあたえている。

地形と遺跡の分布の関りを明確化することも、今回の調査の一つの目的であり、今後、茂林寺沼のボーリング結果からの気候環境の復元をふまえて、分析していく予定である。

第2節 歴史的環境

本市の歴史的環境についてまとめてみたい。

昭和46年時の調査からみる遺跡分布では、池沼や河川を中心にいくつかのグルーピングができる。

旧石器時代の遺跡の多い多々良沼周辺（内陸古砂丘上）、縄文時代早期～中期の遺跡の集中する城沼周辺、縄文時代中期の遺跡の多い旧矢場川周辺、縄文時代中期～後期の遺跡の多い茂林寺沼、蛇沼周辺、古墳時代の遺跡の多い近藤沼周辺、古墳分布の多い城沼・多々良沼周辺と、6つのまとまりを考えることができた。

しかしながら、昨年度及び本年度の分布調査から考え合せると、一概に上記の通りということはできない。

第3図に、昭和46年時の調査による遺跡分布と、昨年度の調査による遺物の分布範囲を上げた。

昨年度の調査では、遺物の分布範囲は、地形に左右されることを物語っている。

洪積台地を深く浸食する谷にそって多く遺物の集中範囲をとらえることが可能である。そしてその分布は、台地全域へと広がる傾向を見せていく。

本年度の調査においても、同様のことが観察できる。

時代的にその特徴を見していくと、縄文時代の遺物を出すところは、比較的少ない。

総体的にみて、台地のやや中央部分に多く、比較的分布範囲もせまい。

これまでの調査では、大袋Ⅱ遺跡で縄文前期～中期の住居址が、大袋Ⅰ遺跡では、同時期の遺物が、大原道東遺跡で後期～晚期の遺物が、間掘遺跡では、縄文前期～中期の住居址が確認されている。

弥生時代の遺構が確認されたのは、東北自動車道館林インターチェンジ建設にともなって、調査された道溝遺跡のみである。

分布調査においても、弥生時代の遺物は採取されていない。調査によって、遺物が数点出土したものに、大袋Ⅰ遺跡がある。

古墳時代前期の遺物を採取できるところも少ない。分布調査では、赤生田で1ヶ所のみである。（昭和58年時点）

調査によって、遺物を確認できたのは、八方遺跡・尾曳町遺跡があげられる。

古墳時代中期の遺物を採取できるところも少ない。

調査によって確認されたものに、八方遺跡・伝右衛門遺跡等があげられる。又、出土地等は不明であるが資料館には、この時期の遺物が、いくつか収蔵されている。

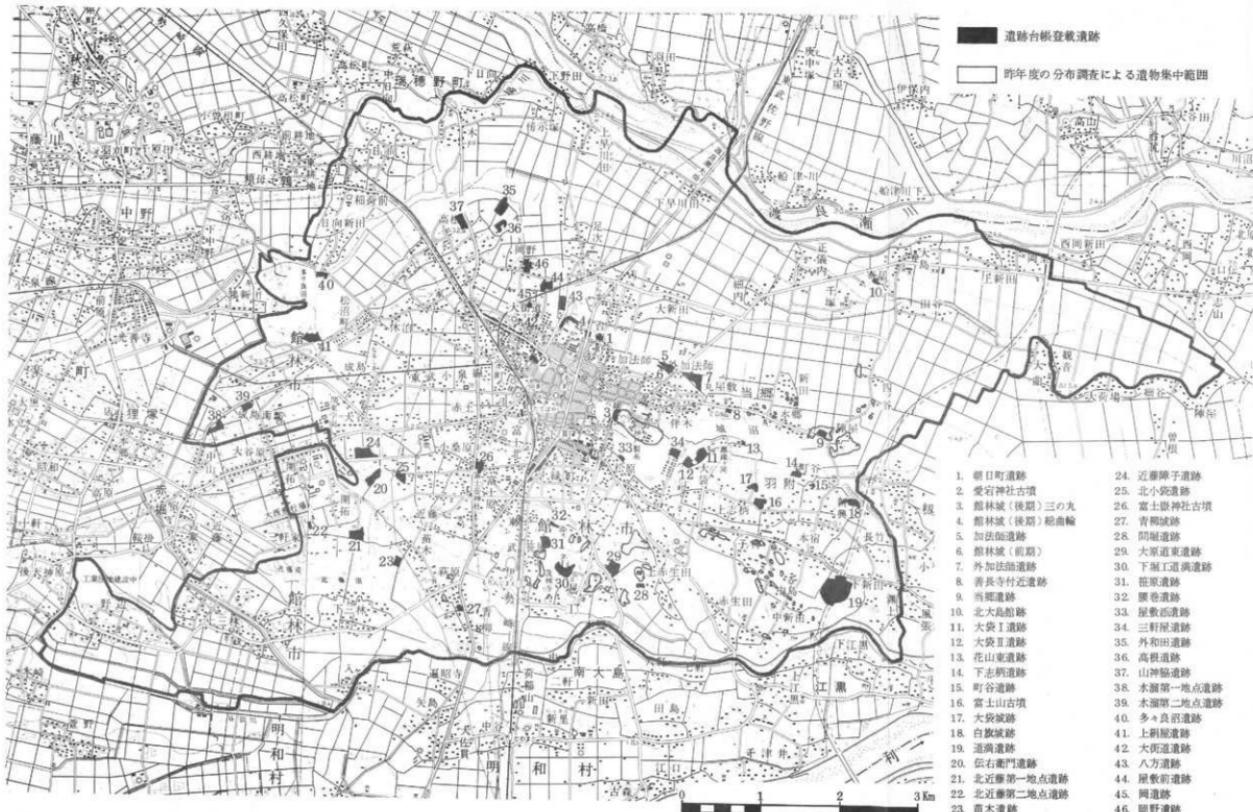
古墳時代後期から奈良・平安時代にかけて、遺跡は、増大する。

分布調査の結果をみると、谷に面して必ずといっていいほど遺物の採取ができる。遺跡の範囲は広範囲にもなる。

この時代の遺跡として調査されたものに、北近藤第一地点遺跡・八方遺跡等が上げられる。

この時期の遺物の採取される地域は、現在の居住区域と非常に合致しており、以後普偏的に人々が住みついていたものと考えられる。

古墳については、現在5基を数えるにすぎない。しかし上毛古墳総覧によれば、市内に67基あったことが記録されており、その分布に集中がみられる。城沼周辺・高根古墳群・日向古墳群がそうであるが、その他、近藤沼周辺にも存在していたことが伝えられている。



第3図 館林市内遺跡分布図

第IV章 調査の内容

第1節 赤羽地区（上赤生田）

赤羽地区的調査は、昨年残った蛇沼東南地域を行った。

字名でいうならば、

大林・林・南・谷向・上北田・下北田・上耕地・上ノ前・宮内・蛇沼の一部・赤生田前である。

昨年度の調査と合せて今回の地形の状況と遺物の分布状況を説明する。

蛇沼から谷向いへて東へ延びる谷は、そのまま細くなりながら、宮内へとつながる。

これにより上ノ前を中心とする高台は、浮島状になる。

この高台の遺物の分布状況は、南東部に奈良・平安時代の遺物が薄く拡がる部分と、中央部に繩文後期～晩期の遺物が濃く拡がる部分がある。

縄文後期～晩期の遺物が濃く拡がる部分については、その台地下を本年度確認調査しており谷にむかって、多量の遺物が流れ込む状況がわかっている。

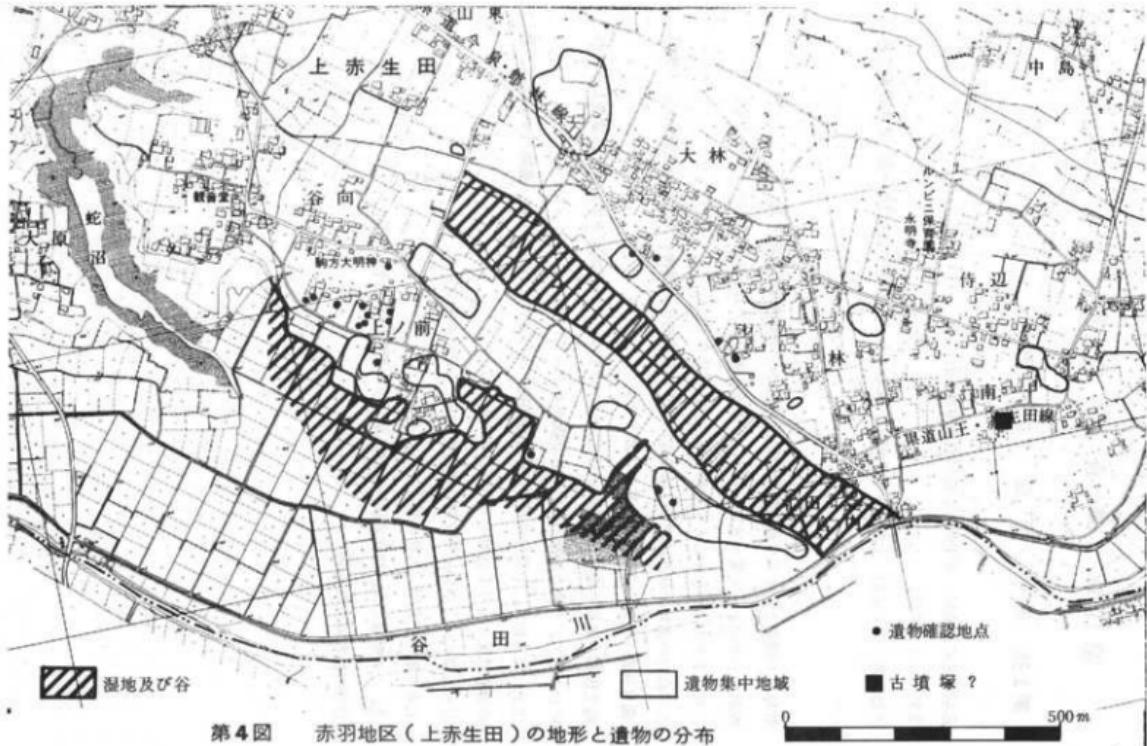
出土した遺物は、中期加曾利E式～晩期初頭にかけてのものであるが、遺跡の中心部は、遺物の散布状況からみて台地中であると考えられる。

谷の北側には、奈良・平安期の遺物の集中する部分がある。

上赤生田・上北田・大林の付近である。

又、この地域には、繩文前期～中期にかけての遺物分布もみられる。

分布の状況は比較的薄い。



第4図 赤羽地区（上赤生田）の地形と遺物の分布

第2節 六郷地区（西南部）

六郷地区のうち本年度調査を実施したのは、東沼～近藤沼にかけての西南部である。

字名でいうならば、

宮田の一部・諏訪・大道西の一部・中島・富士原前の一帯・堀切・障子の一帯・北小袋・小袋・南小袋・大塚・清水橋・中堤・陣谷・苗木西・萩原・苗木・広手・伝右エ門・亀甲・雲雀・開拓の一帯・北近藤・南近藤である。

この地域は、東沼と近藤沼にはさまれた洪積台地にあたる。それぞれの沼の支谷が入り込んだ小規模な舌状台地の多い部分である。

東沼からの谷は、宮田付近で3つに分かれ。洪積台地の奥深くまで入り込んでいる。東側の部分については、昨年度の報告の中で記載済みである。

西北側の谷は宮田から中堤・清水橋を通り、中島・大塚付近まで延びている。この谷の北側にそって奈良・平安時代の遺物が分布している。清水橋付近では、加曾利E式の散布もみられる。

南側の谷は、宮田付近から中島を通り、苗木西まで延びる。

この2つの谷にはさまれた舌状台地の縁辺に沿って細長く奈良・平安期の遺物の分布がみられる。又、縄文中期のものも点在している。

南側の支谷と近藤川によってはさまれた台地は、比較的広い台地で、東南に延びている。

萩原・苗木では、広範囲にわたって遺物の分布がみられる。奈良・平安期のもの、分布状況は薄い。

近藤沼に面する苗木付近では、広い範囲で遺物の分布がある。この一部は現在苗木遺跡として台帳に登載されている。時期的には、奈良・平安時代が主であるが、部分的に石田川期の濃い分布がみられる。苗木西付近の舌状台地には小範囲ながら分布がみられる。

近藤沼の谷は北へ大きく延びる。その谷頭は、最深部では2叉に分かれ、堀切・障子へと通する。

最深部にあたる南小袋・北小袋には、縄文前期～中期の遺物が採取される。又あいかわらず奈良・平安時代の遺物も点在する。

この谷の西側に沿って、いくつかの集中部分を認めることができる。

伝右エ門には、縄文・奈良・平安の集中箇所がみられる。これは、伝右衛門遺跡として現在台帳に登載されている。

谷の西側・亀甲・雲雀にのびる支谷は、工業団地の造成で埋められており、現状では、確認

できない。

北近藤には、谷に沿って奈良・平安時代の大きな城がりを見ることがある。

この地域の一部は、北近藤第一地点遺跡として台帳に登載されているが、遺跡の範囲は城がりそうである。

南近藤にも台地上にいくつかのまとまりを見ることができる。

又この地域には、近藤沼からカギ手状に掘削が延びており、城館址の予想をさせるが、明確ではない。

開拓には、かつて遺跡があったと伝えられるが、現在は工業団地となっており、かつての姿をとどめない。

六郷地区の西南部にあたるこの地域は、まだ農地が多いこともあって、比較的遺物の分布状況が明確にとらえられた。

六郷地区の東部には、近藤沼から北流する大河川の支流である、近藤川がある。この川は、近藤沼の北側を走り、北側の山地を穿つようにして、西へと流れ、最終的には、近藤沼の北側を走る、近藤川の支流である、近藤川に合流する。

この川は、近藤沼の北側を走り、北側の山地を穿つようにして、西へと流れ、最終的には、近藤沼の北側を走る、近藤川の支流である、近藤川に合流する。

この川は、近藤沼の北側を走り、北側の山地を穿つようにして、西へと流れ、最終的には、近藤沼の北側を走る、近藤川の支流である、近藤川に合流する。

この川は、近藤沼の北側を走り、北側の山地を穿つようにして、西へと流れ、最終的には、近藤沼の北側を走る、近藤川の支流である、近藤川に合流する。

この川は、近藤沼の北側を走り、北側の山地を穿つようにして、西へと流れ、最終的には、近藤沼の北側を走る、近藤川の支流である、近藤川に合流する。

この川は、近藤沼の北側を走り、北側の山地を穿つようにして、西へと流れ、最終的には、近藤沼の北側を走る、近藤川の支流である、近藤川に合流する。

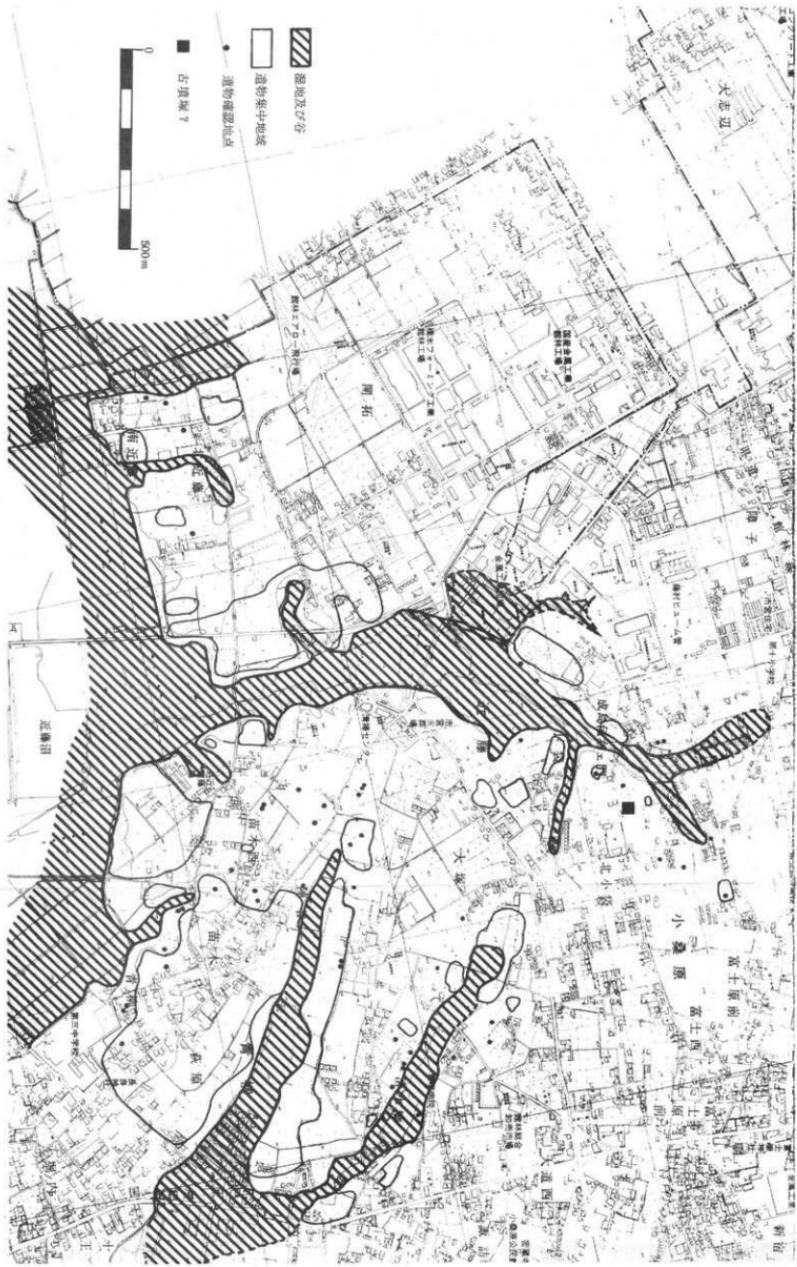
この川は、近藤沼の北側を走り、北側の山地を穿つようにして、西へと流れ、最終的には、近藤沼の北側を走る、近藤川の支流である、近藤川に合流する。

この川は、近藤沼の北側を走り、北側の山地を穿つようにして、西へと流れ、最終的には、近藤沼の北側を走る、近藤川の支流である、近藤川に合流する。

この川は、近藤沼の北側を走り、北側の山地を穿つようにして、西へと流れ、最終的には、近藤沼の北側を走る、近藤川の支流である、近藤川に合流する。

第5図 六郷地区（西南部）の地形と遺物の分布

-21~22-



第3節 三野谷地区

三野谷地区は、全域の調査を行った。

調査を行った区域の字名をあげると、

沼端・稻荷前・宮内の一部・道祖神の一部・近藤新田の一部・道林・下耕地・沖・天王前・鶴沼・北谷・前田・西谷・田谷前・天神前・中林・礫林・一丁根・山・柳戸・根津屋・台・小曾根・大曾根・新田北・雷電・谷中・羽沼・新田・新田西・相ノ谷・東山・大林・西山・申子前・長良林・申子・小林・志部・道木下である。

三野谷地区の地形を概観するならば、三野谷地区は、六郷地区とは別の洪積台地上に載る集落である。

北は、近藤沼の谷によって六郷地区の台地とへだてられている。南は、谷田川により明和村千代田町と境を接している。

台地は大きく二つに分けられる。1つは、大字でいうなら上三林、下三林を中心とする区域であり、1つは、大字野辺を中心とする台地である。

三林の台地と野辺の台地は、羽沼という沼により分けられている。

羽沼は、現在、耕地整理によりその姿はとどめないものの、字名にその名を残す。

三野谷地区は、現在もなお、この洪積台地上に集落が形成されており、宅地のため、遺物の確認量は少ないと。

三林を中心とする台地は、幅65m、長さ280m程の舌状台地である。北は近藤沼、東は近藤川、西は羽沼、南は大輪沼（現在はない）に囲まれている。

台地の比高は50～100cm程度で、台地上は比較的平坦である。

現集落もこの台地上に載っており、周辺の低地帯は、水田になっている。

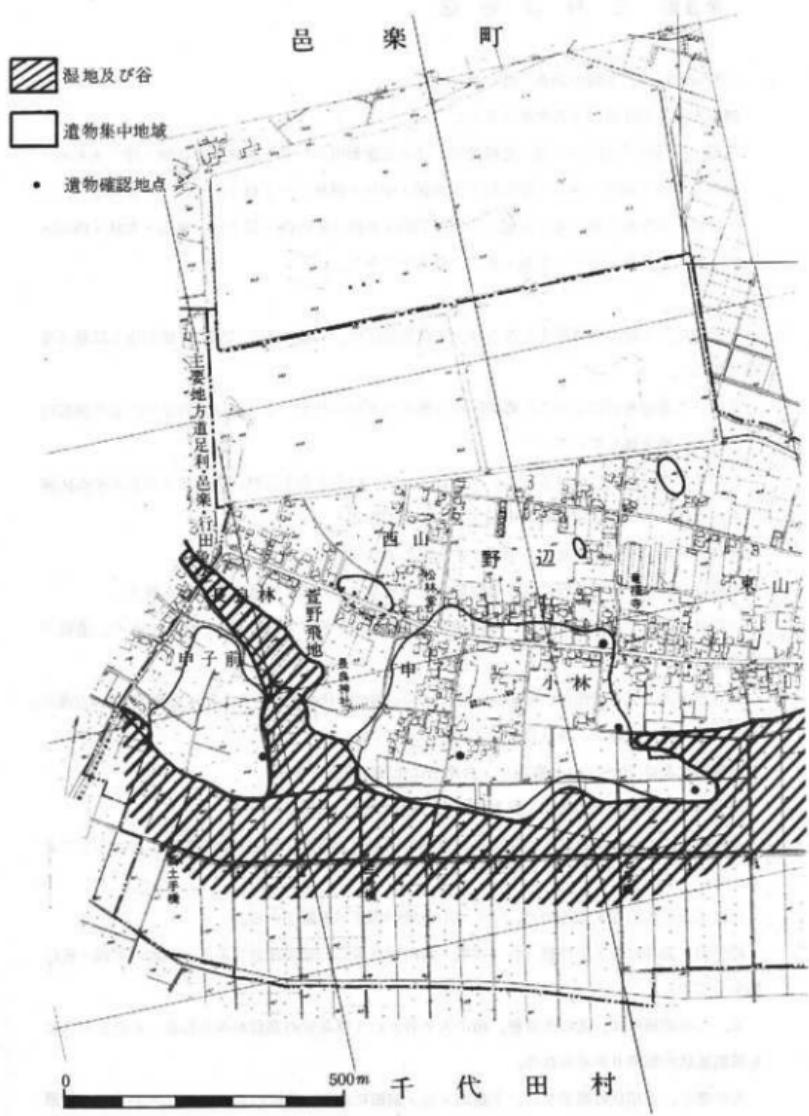
遺物は、この台地上全域に点在する。遺物の時期は、奈良・平安時代のものがほとんどである。

台地上全域に点在するものの、いくつかの集中箇所が確認できる。

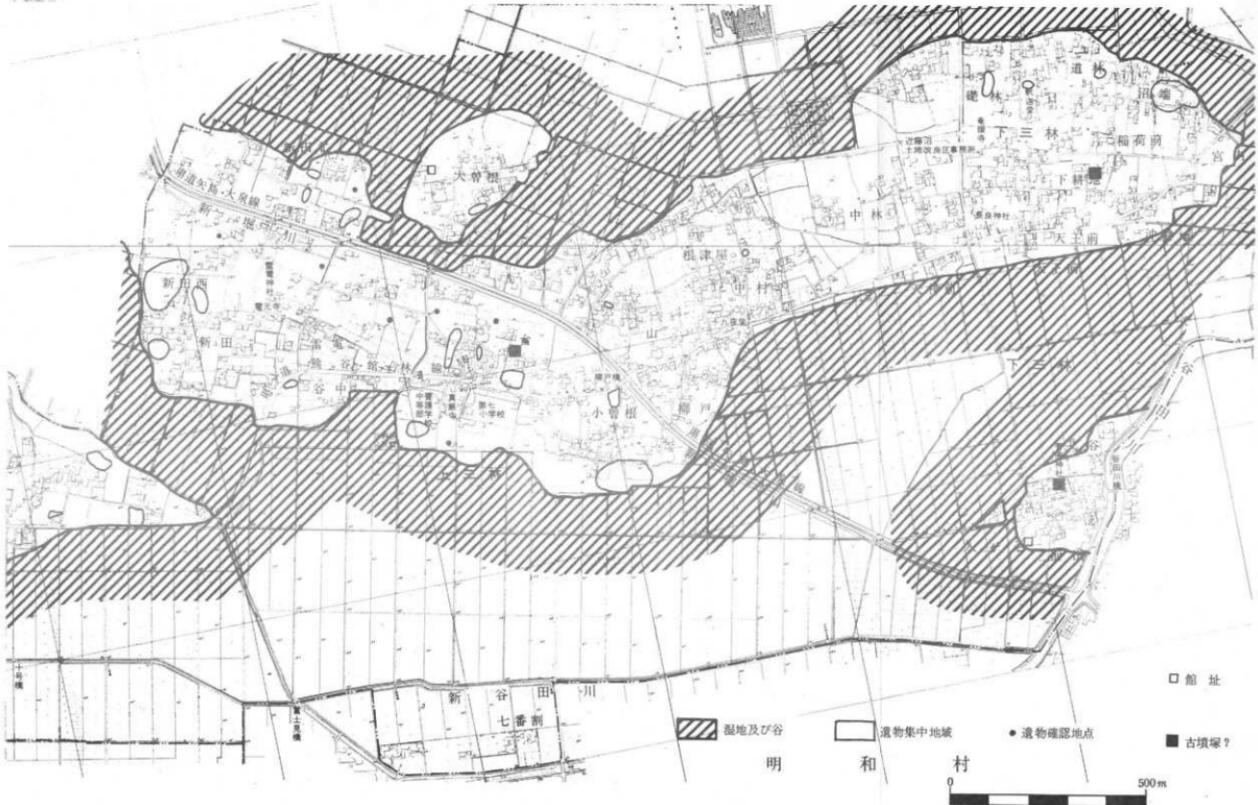
稻荷前・道林付近・小曾根・台・雷電・新田付近がその集中部分である。台地の東端・南に集中している。

又、この地域には、北に大曾根、南に入ヶ谷という浮島状の高台がみられる。そのどちらにも城館址状の掘削りがみられる。

その他に、古墳状の高まりが、下耕地・台・前田にあり、前田のものには、その上に、菅原神社がまつられている。



第6図 三野谷地区の地形と遺物の分布(1)



第7図 三野谷地区の地形と遺物の分布(2)

野辺を中心とする台地は、北の鞍掛から延びてくる舌状の台地である。三林の台地とは羽沼によってへだてられている。

この台地も比高 50 ~ 100cm 程の低い台地である。上は比較的平坦であり、三林の台地と同様、台地上に集落が広がる。

遺物の分布は、やはり全体的に認められるが、特に、小林～申子・申子前には広い集中部
分がみられる。

遺物の時代は、やはり奈良・平安時代のものである。

またこの地域の一つの特徴として、遺物の中に土鍤が多いことが上げられる。

三野谷地区では、昭和48年度の調査では、遺跡が確認されていなかったが、今回そのいくつかを確認することができた。

第V章　まとめにかえて

最後に、本年度及び昨年度の調査において、確認されたことをあげてまとめにかえたい。本年度までの調査をもって、館林市の南部地域の分布調査をほぼ終了することができた。ここでは、館林の南部地域の概要を上げることとする。

まず、本地域の地理的環境を上げると、この地域は、洪積台地と沖積低地の複雑に入り込む地域である。

「邑楽・館林台地」の南側には、谷田川が東流しており、台地上に降った水は、台地を浸食しながら、谷田川に流れこむ。

この谷は、比較的深く、台地内に入り込み、その谷頭には、近藤沼・茂林寺沼をはじめとする数多くの池沼や、谷地が形成されている。

この池沼・谷地の形成には、谷田川の自然堤防の形成が、大きく関わっていると考えられている。

台地を深く侵食する谷も、谷中では、堆積に変わり、谷を埋める土量が多い。調査においては、埋没谷もいくつか確認されている。

このように、館林市南部の地形は、非常に複雑である。台地と沖積地の接線は凹凸が多く、そこには、大小多数の舌状台地がつくり上げられている。

次に遺物分布・遺跡分布からみた特徴を上げてみたい。

先述の舌状台地上ではいたるところで遺物が採取される。

時代別にその状況をみてみたい。

縄文時代

昭和48年度の調査において、最も頻度の高かった縄文時代の遺物の散布している地域は、今回の調査では、頻度の減少がみられる。

ただ、昭和48年の台帳登載地域では、採取されるので、遺跡数が減ったわけではない。

比較的、広い舌状台地のほぼ全域にやや濃い分布をみせるもの、広い舌状台地に、部分的に集中がみられるものとの2通りが観察される。

弥生時代のものは、歴史的環境のところでふれたが現状は0である。

道溝遺跡の存在から考えると、もっと標高の低い台地上に拡がるのであろうか？

古墳時代

古墳時代の前期・中期にかけての遺物を採取できるところも少ない。

今回の調査で確認されることは、比較的、広い谷に面する広い舌状台地の一部分に集中する

傾向を示す。近藤沼の北側台地上、東側台地上などが、そうである。

奈良・平安時代

古墳時代後期から、この時代にかけての遺物は、台地上のいたるところで確認できる。

その遺物の分布状況は散在的である。

ただ、比較的せまい谷に面し、帯状に連続してつながる傾向を示す。この谷に面する部分では、分布状況もいくぶん濃い。

又、比較的広い舌状台地の末端部分にも、濃い分布がみられる。三野谷、野辺などは、これを示す所である。

このようにみると、館林市の南部地区では、いくつか分布状況に傾向がみられるようである。

時代によって、その分布状況に差異があるのは、それぞれの気候状況、又水稻栽培とも、かかわっているのかもしれない。

今後、気候変化や、植生等の分析とも合せて考えていきたい。



館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第11集

館林市埋蔵文化財分布調査報告書(2)

編集・発行 館林市教育委員会

印 刷 オーラ印刷有限会社

発 行 日 昭和60年3月31日



文化財愛護シンボルマーク

ふるさとの文化と歴史を見なおそう